

郭著聞集

卷

新著聞集

勝蹟篇第六

江戸堀田

文晁舊跡

尾州生灰川讃詠橋

奥州蛇塚

伊賀國兼好法師塚

判官屋敷苔燈の跡

信州七嶋犬房丸塚

信州洗馬茶師長廊

紀州車塚

出羽湯山高中大蛇

甲州祐成寺の来由

下野古河頼政神祠

奥州信吏文多招石

信州諏訪七不思議

礎れり今るなりしとや

文覚旧蹟

信州より遠く文明寺今峯山寺といふは等しく不動なる
ハ又上人の自作なりといふ建福寺ハ獨鈷水と
いふ井なりこれも上人のなりといふ常思寺今
ハ蓮華寺といふこれハ上人の塚なりしに於て牙海
なりといふなり

紀州車塚

紀州の山より熊野尾岩なる所の神安寺ハ往昔大磯の

虎尾より成て熊野詣でしに車と曳岩なりといふ
限り煩ひいと遠くも發心者は抹て今ハ
権現への志も叶はざりて衰れぬといふ熊野三山に休
相と画て拜せしりしとき結縁し縁ありける
いふていふ合せおぼしめし經と誦し念佛して経を
空しくししれのみなりとも車と曳岩其ともめ
塚といふゆゑなり車塚といふ一里人ともいふに衰
るなりといふ三熊野をけりといふなり件乃
發心者の菴と神安寺と号するぬみの車にハ妻お十郎

が形見の太刀とれおのゆゑと仰りして実ぬるゝゝ
今ゝ仰りしゝらん

尾州生衣川譚橋

秀吉公小田原北条退治の時堀尾銀助とて生年十一
歳より人におもひに討死しあり其の母獨り
子と前立てりしを余り菩提のたもとて尾州勢
田の町れ申り流る川に橋をたしあり是とて生衣川
譚橋と仰りし

出羽霧山品中大蛇

出羽の國きりふの味ハ大蛇巻居てる護アリといふ
といひしへゝゝさきバ巨巖れ真中に橋長く堅て四寸
より五寸より六寸より七寸より八寸より九寸より
やれつゝめより内より外へは黄をりて石置のゝゝ
鱗の生る蛇はひり隙より回りり首と尾とに
人から鳥井左京喜殿の祈願せしむりゝと
家臣より奉り奉りし人左巻り越へ付し
又けりぬゝゝゝ

奥州蛇塚

奥州三松松原田新多むとふ所の明針のあいてる人
三松人々その蛇と報くまのまゝと蛇群くま
おのまゝと腹と破くんそ一万とやとや上
重く刻くまのえんつものにやびそはまゆ蛇塚
そ今つやの報せく者ハ報く一家とく
ほろびとまういなるあうづうあん

甲州祐成寺の来由

何れ松原独一の境界にて襦子と肩小の多相別箱
根山とこゝあるに日景いす午の所うんとむ

きく一俄く日くれ黒暗くう目移もあぬねて
一足もひくまはしくなつやくわりのいさく是非なて
とろろ木陰の石上く坐く心とあじ佛名を唱く
泣け方とやうく究竟の丈夫太刀とくまのう
るのその草鞋とる松明く立て一文を以馳く
跡くつき着き女ねれいとあまう中くさう
居るく丈夫のいく法師ハ甲斐國くゆきたる
けし信玄く傳言とべ一通くあつて其ハ曾我
祐成とてわりのこころハ妻乃虎信玄ハ我弟の時

宗なりきまは若うけふてつて佛經とよ
佛名と唱るの切なるあふりびく今名將と
りも人々を崇敬せし又弘くたうていじま
りなふにこそ其ハあふの纏縛するはれ
今も其泉るたふひ三途のちあふてつて
修羅園諍の苦患ふくまう願くハ我為に精舎
一宇造営して菩提のまゝたぬりしをいけたく
まゝくわば婦のいゝ安き中事に侍りしを證拠
くしてハあふりつとあふれは是をたぬる也

自費片一でくぐりまきとあふりたふといひはぬ
あふり白くあふり人馬きくせてあり僧思ひきあ
甲陽に越てあふりくれば便とて信玄へあふり
一わば件は自費するあふりて不審きあふりなゆ
秘蔵の腰あふりたふれあふりまは片あふり自費にて
うば是奇特れあふりてあふり廢美あふり頓て一
宇せあふりたふり寺く号たあふりあふりあふり星霜
良古て破壊るあふりたふりくわ元禄中あふりあふり
あふりく縁起の連珠武にハ再興れあふりあふり

松平堪律守殿きこしめさる武田越前守殿へ
いゝやと頼みあひうばやの目費もそそ其腰
乃ちうそねえこそせよふ千金幡龍を以し

伊賀國兼好法師の塚

伊賀のふ阿彌多如庵村乃内國見山吉田兼好
塚うそのうに松のうし寛文七より土民も
塚をほうくずしてこれに面立くらに刃をひ
はめふに大それた瓶をうで中以後をみさう
けう村中多く煩く内神子とせきしう

塚を崩せゝをめ少しうし云と地底乃ち
玄草あずぬいぞうね旧跡を容易く堀
きううそ一本はうにねさめられ一也治西れ
双丘を無名ふとほうそ所やの家は集に
記さういそもこの比乱世うてが所
りそうへちまうやうんそ不審きうり

下野古河頼政神祠

源三位入道自害れ時郎等うそれあらハ我首
うて隠しめくもおちへ我うそね

取て驗とせんとして自害せしむと遺言了
ほりて壺了入て諸國修りせしに下野國古河
少て休とまんくするの件れ壺にづりしに
則ちこれ取て葬りて社と作て頼政明神と崇め
今より社乃類と嵯川彦左衛門殿書けに
明神乃明乃其の月日筆盡半月了なり意
ハコトノ月の射りしはてして名向とせし
いて書くマ自讃せしきママヤ

判官屋敷苔野乃淵

奥州磐城郡菊田郡泉町に判官屋敷とて百間四面
くろまれ築地乃跡なり其の地は耕作すれども崇め
かすは古磐城判官正成といふ人住居せし地なり
石仕りて墓とて女身と投りしに女れ名に
よきて昔は潮とていふ取ハ潮はけしきなり干時
潮れ底とて石れ上りしに昔なり昔なり
投し時とて昔なり昔なり昔なり昔なり

奥州信夫郡

奥州信夫郡に信夫とて石なり福宮とて

くわ行て瀬乃上く山取乃山れ下れ畠にわく
石れ面と搦てうねぶ或や親族乃形何なり
そ人く何なりて田畠の損止多かりれ今ハ
此の畠の中へ埋こさる

信州七島大房九塚

ひ曾我兄弟夜討乃時五郎時宗生捕こしに
祐恒の子大房九扇にして五郎の面をうらりつを
右大將きこしうれ誠にのみ兄弟を振まひ殺せ
つる何れも大房が十歳より親れ敵とせん

者れ面と搏とりつや武士れ及て疎かりか不
乃者我召はる叶へりくはても七考りん更
遠流せよとの由を免さるなりし七考りんハ故
るにや幸ひ信州伊奈郡より大嶋狹嶋殿爲
小出爲福嶋飯爲松爲とて一処ふりてし
上伊奈郡れ内小出宮田諏訪赤木中越より治親
五郷よりとて西院より左遷せり家来
棠本城氏よりはきこひまりてはり大房はわ
赦免なりして身はりしと小出將れとある山際に葬る

それ塚おどに燃えりけり今にまで傳へ
次大房に末葉ハ近比へて堂本氏ハ今に傳へ
城氏の跡ハ今に傳へる残りけりしとあり

信州諏訪七不思議

信州諏訪ハ多岐に靈社にてて貴きもの多し
中にあつく七の目ぞしりし七不思議と云はれ
一神占れ祭といふハ正月元旦に神おれはは乃米や
碎り蛙云云出ると加樂といふ稱宜れぬといへ
るれを取おるれを移おるはあり板薄と白板

れ矢り作てふこと射りけり長官出なれ蛙ハ
國家に悪魔おとむ倭伏すとて件れ矢で切て捨る也
一三月酉日ニあまハ初三つあまハ中れ白とあり
姐すみ面り鹿頭七すみはへり中れ左れ耳
割る頭のやうにけりあまハ是と別の姐に備るの也
一七月七日神狹山祭ハ必ず三光の拜まをせたるく
一神渡りといふハ湖水一面り氷て四日あり下官乃
稱宜見りけり氷の上り一筋はなれありけり
山渡りといふありあの及中けりありし武井庄と栗

林庄子のけニケふの内より山登りて上は諏訪乃内
衣裏ヶ崎と衣ヶ崎と熊穴乃三取乃内へいりまされ
取いてももうよるまにけりしお下れ強流乃内竹が
鼻と四王ヶ崎と南古乃の三取乃内へいりまされ
きしうへ衣裏ヶ崎より竹が鼻へけりあがりハ國土安全
より衣ヶ崎より四王ヶ崎へけりよりハ中生也熊穴より
南古へけりよりハ大返より
河原よりハ原山より取り種ましの麻の生するより
一葛井乃池乃鼻乃まき片目にてけりし名ハ何れぞ

件ハ不思議の内より又あへふさふさのまきにて
とり又ハ石七本として靈物なりハ石よりハ踏石
硯石尾懸石ハ三石ハ社内に入り亀石ハ千野にけり
清坐石ハ矢ヶ崎よりけり満珠石ハ大和にけりけり
蛙石ハ有賀崎よりけり千珠石ハ磯並迎ふより七本
より様本あまよりけり櫓本磯並迎ふよりけり柏木
前宮よりけり檀木社前よりけり幸夷木前宮にけり
根入杉と柳とハ大祝乃小路よりけり
奥州外は鴈風呂由

秋風けりる所合とまる本と奥州外々候ふ所
とき又まゝりありて其の本と合て又ふ残すとい
本多くけりしを拾ひけりて風俗を焼て法
新く諸人とは俗やむいふの白く
捕まふハ成や一鳳乃吊にてけり

尾州琵琶島古志里

大政大臣師長公尾州樂面乃東井戸田了左近
帰海の時終るいふし新志名所と懐く古志
乃里まていふしと喜れと古志名所と人いふ

いせなす琵琶と形見ふみ一をたす遊君雅
あふいまりし世とくきりとりひはあて

はなれはるへつるあき三途川を果て君に
一首は歌と琵琶乃甲了書けりけりけり川ふみ

投字くけりしなまやと歌ふあて琵琶とふに
塚にけりしけり琵琶島と名づけり又古志里

いひハけりけりけり人古志と作しあて
國れ名も貢物と具へていふ

奥州靈池示願成不

奥州南部領奥郡登和田池ノハ南僧坊ニ
大蛇すもり何の如くも岩願ノりたはハ池ノ
刀脇指小刀など投入スル成就スルハ地ノ
中ニ中分付ハ水面と流きゆき一向叶ハハ
水より飛ハルアリヒノ今も動て揺る

伊豆洞中佛像放光

伊豆渚乃下田より二里ばかり隔て一
ノ大なる岩窟アリし三四月ハ此潮ハ干と待て船
空るも奥ノれ入るのあり地ハ奥と又横ハ

三尊ハ如来たせき身ハ大間
光明カキ鮮ノ尊容ハ内れまにま

日向釋帝石乃文字

日向乃國ハ幡といふハ幡ハ社前ノ釋
帝石ノ堅三丈と云ハ横ハ石乃ノ上
下より幅七八分ハ破一ハ中ニ朝日ノ
昔有靈鷲山說妙法華今在
正宮裏顯大菩薩ノ三分ノ一ハ
世談ノハ昔在といハ

頼政蒲乃前伊豆旧蹟

伊豆賀茂郡河内の山の堂いひハ三位入乃と蒲
乃前の木像と紫一也頼政討きぬいく後藤
乃ま入ふりてはありいききるまひちありとあり

阿闍梨池いる池祭禮

肥後乃阿闍梨皇田坊とすいしき天台の夢ふ面
乃りしが成佛の乃文定一なるいびてあく弥勒乃
會上了詣てばとて長壽の蛇身とひさひ遠州
笠原の左橋池に栖りあらる源室上人衰れに

たりわして櫻が池にしたる信州善光寺に詣て
さやとうと誘ひらる彼の泣きさやとうといや泣か
佛殿のまへ俄に池に出できる水をきにぬく正月十四日
同日まさに水をきにぬく寺内門前
乃阿闍梨詣でその門戸に開けしと君らとあり
又同國坂なれ内ひふとあり大なる井の四面峨い
たる岩とびく立やくにあらる遠江底にりし
乃件れ時節のハ水をきにぬく冷いなりし乃是
乃阿闍梨とえき寺法での休みとしる俗呼て

すつあてりけきハ幾ど建立するとも火災なり
其故ハ開山法燈國師の文を水去り火登と書ハ
但しけき一度造営れ志ろハ我造立してぬん
りりまもはわハ焼失すへー但し護一堂
一字ハみらん経のれ日やまう己来我經をこれ
りり昼夜心よりするなし紙ひ焼失す大經造
せんり偏り希とろまバるバハく易き事也
傾状ちりり去りてに寺方ハいひくれんそと問ま
あれ我ハ上別赤木山乃松林坊とすもの也
と

いふてりてゆれりハこれ程の大儀を造営
ハと宣ひりり礼謝するそ兩僧とろくと上別
りりりり赤木山乃りり里人乃松林坊ハ
とハせれりりハ大天拘りてたりゆりそ古
りりり怖りりりり使とほめりりりりり
そし戦りりりり嶮難りりり山伏二人出来りり
寺乃使候りりりりりりりりりりりりり
さきとして先立てりりり金銀珠玉ハ宮殿樓閣

金浄を乃莊嚴もつやや目とたどるが肝とひや
す珊瑚の梯とつり瑪瑙乃階と上り松の房の
清い戦兢としてぞつり候傍遠境とあの手能
まねし清雲建立なる入来年ひくれば住ぬも里
下り里人も驚く火と滅一人切すくやひと驚く
い合られやの眼の金糸のひるまは鼻と高し
し怖しと云ふわらう先の山伏三人来りて送る
らせりやとさるや也わが肩つらつき目とぞらて
るくくまのわびに教へゆにぬき二時ぐわく虎

空と飛行するぬるねり足乃地つくやうて
目とひきき山伏はうて法燈寺の庭あまきう
あつてはるのねりゆとやてとれちねの月日に
あしは急き里とるう所の者にむひやノセ
あつてはるし数十百人乃聲して宮本挽音手斧
杵音とるしとやと夜うあてとれ七堂伽藍
とあつて金銀とるし珠玉とるきとてまきり
云ーぬ達とるやとて又回福るねびーが護摩堂
ハ恙とるく今ぬあつてはるとあん

信州駒ヶ嶽馬化して雲へ入る

寛文四年了尾州より本曾路順見れり大目付
佐藤半太夫勘定方天野四郎兵衛金役天野孫作材木
役都築弥兵衛小目付真鍋茂太夫等より本曾路より内
とておのれり山村甚兵衛家来入所の百姓より召
はせしめて獄に繋ぎしに其形相より人より毛髪しては
喰巖よりやに蘿草よりちてはわりへき大なる芋毛
馬より首れ毛も尾もゆりたまひも眼れはるるハ鏡
よりくろくく其形相より人より毛髪しては

然るに乃馬人影と見えし中太夫と云ひしに登
まりし劇より雲たち覆ひし方よりしし其の
蹄よりしきと見えしに尺よりしし也は乃東の
方より駒よりしし大石よりしし雲にまて雲はあ
るい名よりししはるくあり

芥川千代古道本説

行平の暖哉乃山と云きよりし芥川のふびの古
跡ありありい歌よりしき暖哉より芥川より人
たよりし名よりしきあふよりしき

世より多かりしゆきハ芥川乃ち幸ハ嵯峨天皇の初
 てなされしゆきハ淳和仁明文徳乃三帝を
 こゝそ光孝天皇乃清代りしゆきハ御を再ひ
 芥川乃ち幸りしゆきの歌ハ嵯峨天皇乃御を
 實竹田の芥川より嵯峨の山よりひきと暮せ
 ともふり幸るまふ代乃ち讀ハ讀ハ
 山よりたててやせしるハいさか御を
 侍りし

九百年來賣家

能登國鴉嶋といふ所の酒屋三無衆といふ者ハ
 弘法大師乃清代り建ハ建ハ
 改めゆすといひ候へしゆきハ所家の造作を
 ともりて柔れをたけしゆきハ歌
 おね氷乃ち雪れもすの雪れも下れ七葉ハ
 おのよ師ハゆきハゆきハゆきハ人より各々
 一ちりハ弘法大師乃清代り給まかりしゆき

新著聞集

勇烈篇第七

凶年と厭ひるゝ親子氷了没す

佛船和尚句と吐て賊と

鰥婦狼と害す

女夜盗と擒

童僕辱と過自害す

寡婦夫の奪集首

美麗少年義と思自殺す

愚丈夫を誑て被レ疵

強力重檐耳力得金

信州高遠大蛇と斬害す

童子狼と害す

老父園暮聞二子久

讒さん
入
討うち
身み
入
立た

乞人理了伏乞火水

と
截きり
害がい
す

蔵毛を生ず

犬^{いぬ}虎^こノ^の来^き啞^お

壯夫自報遺書詩歌

積聚と截獲長壽

凶年と厭ひ苦て親子水了没す

天和乃く災おはき、飢饉して餓死する者都鄙に

多く、少く、戸、とらふ、橋、乃、とらふ、と、時、とき、徘徊たふさぐセ

浪人^{うりや}とばかりも男^{おとこ}幼^こき子^こを伴^{とも}ひ携^もはめ^めて糖^{あめ}を

そゆを金ふ
暫く待べー
そゆの方ハ橋の

久
き
やう
く
に
まへ
廻
る
を
合
せ
浩
々
と

波^{なみ}浪^{なみ}に中^なに飛^と入りしと往^い来^くの人^{ひと}えんかくと云^いふ

かゝ
誰
も
て
い
き
揚
る
ま
も
か
る
じ
に
は
遂
に
水

底^{てい}のくま^{くま}と^とく^くじ^じ良^ち巧^くで^で年^{とし}高^{たか}く^く翁^{おきな}の頭^{かしら}ハ雪^{ゆき}

を載き腰ハアと張色々く瘦けり右乃女にハ
數珠をり左乃より杖をけりるばい来て
かの幼きものをとて親父ハいけりつて
いひて携へて赴き往まの令るをりて
そとハ自づ子にていりも昔時ハ免れ此なる
世を憂もねりて言せりいひて我ハ旬の中
かく幸き世にたすむとてけりて地を嘆く
ふも所をから孫と連おし面がく不審なる
ひいて泣き返くうらまをまりし小娘ハさうて
る

しう暫く待てよ冥途黄泉まで親子れ契争で
たれやといひも果す漫くう中に飛らんと
えり人といひ袖をぬきありんといふハ
乃衰ハ多かりしをばうらまの教ひ侍りじと也

佛船和尚句と吐て賊とく

上州大久保村乃龍雲寺へ天和三年十月に盜賊
入し時佛船和尚頓て起出ぬい竹篋を持偈と説て

今朝起出小龍窟 脚下分明十月天

凡俗不知之一句 白雲不礙四禪天

云もつて賊徒と無二無三と打きしう一人ハ
即坐す次丁残黨ハけいきけいし恐まらむに
逃去し和尚則ち竹篋と成骸す袂に出院し
たまふけいきけいけい殊勝乃働かり飯寺
まのて再任かりしと也

鰥婦狼と害す

武州榛澤郡いづ村乃左左衛門しり者耕作に
出て狼しりし教所とて二十歳なりけ妻しり
口惜しりいむいむはもして狼とてさうく人
口惜しりいむいむはもして狼とてさうく人

乃左衛門提あふくし取求りしにけり時大なる狼
うーろろとあふくし取求りしにけり時大なる狼
陰とてうろろとあふくし取求りしにけり時大なる狼
怒て起りぐんぐんとけり中陰とてうろろとあふくし取求りしにけり時大なる狼
聲とてうろろとあふくし取求りしにけり時大なる狼
ており舅の志り貞節なりと感し一筆とて
家とてうろろとあふくし取求りしにけり時大なる狼

女夜盗と擒

江戸堀江町の某やへお登り亭主とてけり

妻起出て聲をきこしうば盗人逃出中とせらる
まを追うる足と捕へて引あつて戸を叩き
盗人ぬき倒れしうば頓て壓へらる大音して
生捕と叫びし人こつて内へて掘らけり
王子乃と樂寺乃修徳と報せし古著長左衛門と
り強盗なり無宗寺ハ女れ伯父なり夫と伯父の
敵と女れ力にして生捕ハ因果なりと云ひ及
りも勇から振出しやと誉感せらるはつと
童僕辱し遇て自害す

神保左京亮殿の家来黒柳仁右衛門といふ人の相部屋
乃何氏物矢りしとて遠くまで詮義はる
召仕乃小野即ち縄をかけるまじが外より女を人
りし後少部卿といふ我賤しき方にし
しに若くはまじとてかく縄めれ耻し達ぬもの
口をさし獨り言して恨しと傍輩のありて
少も耻辱するはつとと教訓しあれど
ひさすにわかれの疵めしはわかれ自害あり
かく牙乃猛き志いふる先祖と想やれしと

人々におぼへぬがうハかりしとらん

寡婦^{こふ}夫^と乃^{すなは}鼻首^{はなう}と奪^うふ

大坂上八町目札^{おおさか}乃^{すなは}辻^{つじ}乃^{すなは}町^{まち}乃^{すなは}鎗權藏^{やうけんざう}とて溢^{あふ}者^{もの}に

博奕^{はくぎ}又^{また}八人^{はつにん}請^こふたちしおれ^{おれ}のち^ち人^{ひと}欠落^{けつらく}とある

と人^{ひと}より崇^{たか}らま^まのころこれ罪科^{ざいこ}きり海^{うみ}で禁^{きん}

獄^{ごく}にほめ^める鼻首^{はなう}ち^ちま^ま一^{ひと}せ^せま^まの妻^{さい}を^をとせ

させ一^{ひと}成人^{せいじん}乃^{すなは}子^こと咄^{はな}ふせ^せぬ^ぬが^が父^ふに^にて^てハ^ハな^ない^い

や^や我^{われ}が^がて^て何^{なん}上^{じやう}ハ親^{おや}と^とあ^ある^るび^びや^やあ^ある^るハ頸^{けい}と^と晒^{さら}

一^{ひと}まん^{まん}の^の甚^{しん}心^{しん}憂^う一^{ひと}が^が今^{いま}骨^{こつ}頸^{けい}と^と登^{のぼ}らん^{らん}や

何^{なん}も^もが^が子^この^の目^めを^をも^も及^{およ}ね^ねハ^ハ何^{なん}の^のか^かを^を先^{せん}江^え儀^ぎ乃^{すなは}

恐^{おそ}ま^まる^るの^のか^かま^まバ^バ叶^えハ^ハ何^{なん}き^き一^{ひと}向^{むか}ふ^ふと^とあ^あし^しか^かど

東^{あづま}へ^へく^く更^{さら}て^て子^こと^とね^ねし^し骨^{こつ}と^とあ^ある^るじ^じり^り自^{みづか}ハ^ハひ^ひと^と

う^うほ^ほい^いき^きワ^ワあ^あと^と目^め拾^{ひろ}ふ^ふと^とあ^ある^るぬ^ぬ黒^{くろ}暗^{あん}と^とあ^ある^る人^{ひと}

す^すと^とと^と獄^{ごく}門^{もん}場^ばと^とあ^ある^る何^{なん}も^もい^い懸^かり^りし^し頸^{けい}と^と探^{たん}

ワ^ワが^が夫^と乃^{すなは}頸^{けい}ハ^ハ異^い人^{ひと}より^{より}ま^まも^も大^{だい}き^きなり^りと^と下^{した}に^にて^て難^{なん}か

く^くお^おろ^ろり^り少^{せう}橋^{はし}乃^{すなは}寺^{てら}町^{まち}乃^{すなは}菩^が提^{だい}所^{しよ}を^をわ^わく^く頼^{たの}て

火^ひ葬^{そう}と^とあり^りと^と後^ごの^の火^ひ葬^{そう}や^やと^とあ^ある^る人^{ひと}を^を地^ち所^{しよ}

う^うて^て及^{およ}び^びて^て何^{なん}の^のか^かハ^ハ刑^{けい}罰^{ばつ}と^とあ^ある^る人^{ひと}を^を地^ち所^{しよ}

はま乃歌乃がけと云れむかの者かぬと
濃情をぬく取と飛かると捕へて公儀よりつ
新へしはわう頸刎らむと云う

美麗乃少年義をとりひ自叙す

武府東叡山乃青龍院乃扈從喜平より十六
ありしが容儀艶麗小く心さぬいさうし
あつに津平坊主と申す顧憲一公三位といふ
傍でたのそとひく云りしうどまの意は
けりりいふふ不義の厚く入るべきとて文心せ

もせけりしるばまを助はまうに堪ふ我部屋にて股を
突ぬきて喜平といふをわく拓きかくるまふひの
ゆかきくどもあれを頼てより油乃裏をきり
破り綿をとり出し流る血を拭ひけりまふはて
あまより昼夜人めを忍び看病し一病やうく愈て
後乃朝喜平親王の元日高きまて鳴けりしは
玉泉坊といふ納所にてたきしりき音もせは
あやとて戸を破りてふれむ机よりそたき眠り
右よりけりしとてまふ起さんとするに肌を

脱^ぬげ腰^{こし}一文^{いちもん}なり切り通^{とほ}し其^{その}刀^やを^をしきまぐ
或^{ある}一^{ひと}ぬが^がい^いに書^か置^き乃^{すなは}一卷^{いっかん}てや^やる^る筆^{ふで}して
朝^あふれも^も海^{うみ}を^を今^{いま}ぞと^とろ^ろる^るに^にり^りれと^とり^り（^さる^るの^の上^{うへ}）
て^てり^りし^しを^を助^{たす}け^ける^るも^も嘆^{なげ}き^きに^に堪^たへ^への^の護^ご國^{こく}寺^じに
走^はり^りて^て我^{われ}に^にり^り出^いで^で一^{ひと}り^りれ^れや^や増^ま云^い置^き自^{みづか}害^{がい}
せん^{せん}と^とし^しあ^ある^るを^を喜^{よろこ}平^{へい}母^{はは}及^{およ}ひ^ひ親^{おや}族^{しゆ}き^きつ^つあ^ある^る
い^いひ^ひが^が止^{とど}め^め一^{ひと}り^りか^かく^くて^て髪^{かみ}を^を刺^さ高^{たか}野^の山^{さん}を^を
ぬ^ぬが^がり^りも^も誂^しと^と吊^つひ^ひあ^ある^る寛^{かん}永^{えい}十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}秋^{あき}乃^{すなは}
る^るなり

愚^ぐ吏^し童^{どう}と^と誂^して^て被^ふ疵^さ

大^{だい}坂^{さか}一^{ひと}獄^{ごく}門^{もん}乃^{すなは}頸^{けい}所^{しよ}も^もい^いや^やに^に時^{とき}伊^い藤^{とう}丹^{たん}後^{のち}守^{しゅ}殿^{でん}
器^き量^{りやう}と^とあ^ある^るを^を少年^{せうねん}乃^{すなは}者^{もの}と^とり^りて^て誰^{たれ}も^も
の^の獄^{ごく}門^{もん}場^ば一^{ひと}り^りび^びき^きや^やと^とい^いふ^ふ一^{ひと}腰^{こし}を^をい^いじ^じて^て
ろ^ろろ^ろ茶^{ちや}場^ばを^をす^すて^て出^いて^て腰^{こし}乃^{すなは}物^{もの}拜^{はい}領^{りやう}し^しる^るバ
ほ^ほい^いろ^ろん^んと^とい^いふ^ふ一^{ひと}り^りは^はり^りバ^バと^と一^{ひと}腰^{こし}を^をい^いじ^じて^て
ろ^ろろ^ろの^の取^とり^りや^やも^も後^{のち}乃^{すなは}證^{ちやう}拠^こし^して^てい^いひ^ひ
飯^いと^と頸^{けい}の^の口^{くち}ろ^ろい^いま^ま一^{ひと}の^の頸^{けい}食^{しょく}音^{おん}し^しあ^あ
る^ると^とし^しも^もさ^さに^に立^たち^ちろ^ろん^んと^とす^する^るを^をい^いふ^ふ

一口^{いぐち}のひししと云ていそ食^くせん^と云ゆに眉間^{みけん}と
ぬきうちして只まゝ一人何ものもなかりが
問^とふハカ^かゆり^り侍^しじとふと^きき^きふ^ふひ^ひと
動^う博^{はく}く^くふ^ふへ^へい^いし^しや^や思^{おも}ひ^ひす^す、^し長^{なが}年^{ねん}乃^のの
かまはあどあか^あく^くけ^けく^くか^かど^ど定^{さだ}て^てな^なま^まん
そ^その^の信^{しん}乃^の者^{もの}了^り懸^{けん}了^り云^いく^くや^や伴^{ばん}ひ^ひか^かを
そ^そ先^{さき}へ^へは^はり^りと^とれ^れに^にか^か者^{もの}な^なか^かけ^けく^く己^{おのれ}に
首^{くび}を^を臺^{たい}了^りれ^れせ^せな^など^どえ^えん^んと^とち^ちに^に案^{あん}に^にお^お遠^{とほ}して
肩^{かた}を^を了^りて^ての^の疵^{きず}と^と被^ふる^るの^のそ^その^の世^よ乃^の笑^{わら}ふ^ふ中^{ちゆう}に^にあり^りは

の^の若^わ年^{ねん}ハ^ハ安^あ藤^ふ乃^の刀^{たう}派^{はい}は^は冬^{ふゆ}廣^{ひろ}の^の子^こ也^{なり}大^{だい}坂^{さか}陣^{じん}乃^の後^ご
冬^{ふゆ}廣^{ひろ}ゆ^ゆと^と和^わと^と都^とく^くや^やど^ど終^{はら}く^くを^をと^とけ^けり^りし^しに^にあ^あて
討^うた^たく^くも^もた^たく^くせ^せく^く云^いふ^ふ梨^り

強^い力^{りき}重^{おも}く^く擔^かひ^ひ耳^{みみ}力^{りき}得^え金^{かね}

勢^{せい}州^{しゅう}松^{しょう}坂^{さか}乃^の瀬^せ田^{でん}又^{また}ハ^ハ江^え本^{ほん}町^{ちやう}と^と國^{くに}許^{もと}へ^へ上^ある^るを^をて
れ^れ掛^かあ^あく^くと^と田^{でん}京^{きやう}く^くり^りに^に町^{ちやう}人^{じん}の^の所^{ところ}也^{なり}ハ^ハ遠^{とほ}く^く遠^{とほ}く^く
かく^くて^てハ^ハ馬^{うま}出^でさ^さし^しと^と云^いふ^ふ又^{また}ハ^ハ日^ひつ^つと^とハ^ハ利^り澤^{さく}と^とる^る
商^{しやう}人^{じん}と^とハ^ハ武^ぶ士^しと^とも^も負^おて^ても^もほ^ほく^くさ^さり^りな^なと^とた^たれ
義^ぎハ^ハち^ちや^やな^なく^く一^{いっ}定^{てい}乃^の通^{とほ}り^りい^いと^とや^やれ^れな^なく^くハ

人々取らば一耳と稱し一たりて中間より小判一
と云ふ序耳といふ事小判は一たりんハ雲より
雲へ又雲えづんハてぬんべーの縁をうてり
又ハ今と云ふは力と云ふ一雲に少くも動く
陰よりハ又ハ腰より縁をぬき平人ゆきうき
ひきじやど更よりゆきゆきしハ又ハ負て金と出
あらう

信州 高遠 斬害大蛇

信州 高遠より保科肥後守殿にこそ一附伊奈郡

蓑輪入中大茅原より大蛇蟠居あるより鷹匠
頭井深九郎兵衛より組下より告りぬゆきの見
より置べーとてまじり深くつゝ入りに大蛇眠り
へり斬り音ハ白くいくとくちくと忍ひより
難作より首をくちぬきあれど頭たちち地より
ぶづつと胴よりくくく地震れくくして切口より
白き霧乃立ちあがり俄より天より曇り雷電四方に
ひくひく雨大河より下りてくくくくくくくくく
ふれ大なるおどろい急きまきり少頃乃城を下

ろろろ大蛇^{ドバ}一^リ人^ニ追^ツふ事^ハ来^ル今^ハ
道^{ミチ}れどと^ハお^ハりい^ハ抜^キ設^セる^ハ刀^{タテ}を^ハ以^テて^ハひ^ハく^ハ切^キ倒^タす
其^ノ子^モも絶^チ然^ト一^ハありと^ハ今^ハ何^ニも^ハ漸^スく^ハ連^ル
みま^ハる^ハ百^ニ日^ハむ^ハる^ハや^ハそ^ハ快^ク氣^キ一^ハあり^ハ雨^{アメ}昼^{ヒル}や^ハ
所^トも^ハか^ハく^ハ三^ニ日^ハ少^クし^ハ信^シ州^{シウ}一^ハ國^ハハ^ハ洪^{コウ}水^{スイ}を^ハて
取^リく^ハ損^シと^ハせ^ハり^ハ晴^ハて^ハぬ^ハち^ハぬ^ハ地^チを^ハ往^キて^ハそ^ハれ^ハ頭^{カビ}
ハ^ハ敦^ツ原^{ゲン}を^ハり^ハ洞^{ドウ}ハ^ハ小^コ沢^{タク}を^ハり^ハし^ハ及^ツ人^ニと^ハふ
ふ^ハれ^ハ毛^モ堅^{ケン}く^ハち^ハて^ハ思^フま^ハる^ハ

童子^{ドウジ}狼^{ロウ}と^ハ害^{ガイ}す

丹^ニ後^コ岑^{ソウ}山^{サン}嶺^{リョウ}乃^ハ肉^{ニク}を^ハく^ハ子^コを^ハも^ハま^ハて^ハり^ハと^ハり^ハ
狼^{ロウ}乃^ハ出^デる^ハ一^ハの^ハバ^ハを^ハく^ハ逃^{ニゲ}れ^ハり^ハし^ハと^ハ葉^{エフ}を^ハり^ハ女^メ乃^ハ子^コ
逃^{ニゲ}る^ハ一^ハの^ハ狼^{ロウ}を^ハり^ハと^ハま^ハる^ハと^ハ十^{ジュ}一^{イチ}歳^{サイ}の^ハ兄^{ケイ}竹^{チク}藏^{ゾウ}逃^{ニゲ}
か^ハり^ハと^ハれ^ハと^ハ取^リて^ハど^ハ一^ハ持^チる^ハ狼^{ロウ}の^ハ眉^{メイ}を^ハ
ろ^ハう^ハち^ハと^ハ引^ヒき^ハる^ハ鼻^{ハナ}柱^{チウ}を^ハて^ハ切^キり^ハき^ハ
狼^{ロウ}ハ^ハ嗽^{ソウ}へ^ハと^ハ子^コと^ハ一^ハの^ハ振^{フリ}て^ハと^ハ竹^{チク}藏^{ゾウ}が^ハ頬^{ホウ}を^ハき^ハふ
と^ハい^ハは^ハる^ハ時^{トキ}鎌^{ケン}を^ハり^ハか^ハと^ハ咽^{ノド}を^ハり^ハと^ハみ^ハ引^ヒき^ハ
し^ハと^ハ狼^{ロウ}も^ハち^ハち^ハに^ハ死^シす^ハ竹^{チク}藏^{ゾウ}絶^チ然^ト一^ハと^ハ五^ゴ
あり^ハと^ハ人^ニに^ハ走^ハり^ハ来^キて^ハ葉^{エフ}と^ハ思^フし^ハと^ハ竹^{チク}藏^{ゾウ}し

或ハ定リしるみかり活てゐるハ能仕合なり若
死すべき場にて逃てやうハなげくべきなり
としてすうしと噪ぐあしきなりしけ若し物
ハ一生一鐘十七兩にて着やうし勇者にて
侍しとせう

虎勇威と畏る

大坂乃凍り能て催し一日に所じおむに
あむし虎放りくむをせし諸人鬼といひ
四角八方へ逃ちしを秀吉公も必死にたせし

大名小名も周章しにきりしにあらに上様
秀吉公は伊達正宗加藤清正にあら
虎ハいきほひから秀忠公と目し侍前の
椽へ翔けしとてたしきせきゆいさく
沖新とゆりしとあら椽かき通し正宗清正の
うきいあらし兩人膝ときてし刀にきて
うきいあらハ勢出虎すくと度へたかり也
實し大勇乃威しハハ猛獸すくねりあら
のぞかれの感伏せしとせ

讒と討身と

田中筑後守殿能や一にふ時中々百姓ひびきて傳言
乃袴了ノ足かくとあれむ主人乃用更はめあひて
只今乃る許免めと懇懇了了せば丁に
そくくびと云へく側らる人乃云くハ免ふ
ヤセ反踏でも陶てもくくくぬく云くわに
堪忍ありかくて相手の方へゆきや控くれり
討果了く覺悟のまゝとありく何分にも
相心ゆりしやうへ此方より左右すべし

いさ書状調へ置てこの讒者れ部屋にいき不届の
おひきい云立切殺し首とるも相手乃さへあき
うれるゆへ能はる設く末期了酒せんそ
三献くさあ取へ大勢あつる妻細とき屈者
る人了訴へせば大に感ぐきぬい相あて
果とべくび左様乃者ハ家乃騒動乃本あり
一族ども意趣とねへくく作らまゝとあり

幼年人を討義と

田中筑後守殿家中の子どもより合宿市と

何れとい十五歳なり者七歳乃者の頭と云
あり何糸幼きとて士乃面と云と云りや
之ときと詞を流しひたのち四五日終てすま菜大
者何心もかく遊び居ありと云く走りて
只一討つきり殺しつて家へ取りかき乃
侍りて親へ告あれど親大へはなれり相
手乃方へ取しめぬの親は子の不覺ありと
云ひのちつとつと男の子と云の子と云く
家へ流せしめ侍りて一向へ云くと彼子

きく届ありとて養子と云んと云ふハ悦ありと云れ
ども善くは多悪くつと云ふ子の更と云ひひ
ぬりハありと云く只士乃義理と云くは云ふ人
あり人をうけて活てハ居られども是はあふ自害
せしと云ふ人

乞人理り伏して火に入る

美濃郡上郡遠藤備前守殿城下の寺に普閑と
云く一人相と云く雪乃日火葬しあり葬場と
云く乞人来り供と云くと云ふ人なりしと云く乃云く大なる

涙を流しぬいなる宿縁よりくく今またの
夫婦をやろいけん今夜庄屋が取為りて
非理より虎の餌よりする口惜くはるもかに
およりび物と恨をも敵と取て成すへとや死
口説くは能言とや聞ふはくんあやとて
とちとて一に上やう達くあれど新ふも
衰まがせぬい庄屋が心根やうきなりとて
刑罰より作らるも犬の跡吊へとて庄屋財宝
はくく夫婦乃者より賜ひあるとて

至心の火定身儀不亂

池上意三八大儒の譽れ世より尊へ十六歳にて水戸
黄門公へ召出され和漢の萬巻より眼を晒し
いふも人よりてはりもある佛縁乃ほあるや
ある時延命地藏經をねんしてききもち世に
てありき菩提心強くたうて大守へいふをよひ
世にききものより曾節と名をとりしめ形を桑門
うてあり都よりうて童の風車と弄ふとて
桑の縁の縁は風車より我のゆくちるん

と讀てあり風車軒くりりやの後勝尾山二階
堂了んもらるゝふぬ日やなび思ひるに
きて火定へへへて薪の積我中
香烟と出すと相圖了火とやあやめ給ふ一
世の詞とて

せ乃ちやといてねる橋元山は乃ちううん
と讀て入りぬとて念佛誦經の聲きこへし
人々烟とて火やあやめに山く谷く光く冬
のちが同音了念れし清くうのそまうておのく

寄てるに左乃より香炉とけあ右のよに念珠
とてたき行儀すしも乱れにたいさう

壯夫自殺遺書詩歌

貞享二年十月了兵庫湊川廣嚴寺へこれ縁
かぬ若士まゝ来りて楠正成の塚をのぞき
見歩きて飯しる翌朝佛殿乃側ら林中の少
たりき取了て腹一文をとり返し俯伏して
或る傍了今も千匹香奠とあつる扇子にのせ
又一封の書りノ披きと方に野夫不逞の故院

了葬了は多生の鴻恩なり唯是を希ふ乃
末期了臨に謾に口ずさく廣嚴寺方丈
呈す

攝成信

昔日義將戰歿所 芳名堆塚旧湊川
誰知月下默然意 霜葉隨風散籠煙

瘞瘼のちもよてたのびて今頃なほふ深き
とけしとてそとに人々をばうばてし瀧の尾に
新つらねうは檢使までみんころり葬れけい
いぬいゝあの人にもやい長門國毛利家の人ぞ多に

丹今くいつゝ名を意白とけしあわのせし
舎兄ちりし黒沢士多氣といひ人々廣嚴寺へ
使者も来せし也

さる屋敷に吏候者と討

濃州郡上をなす作の家まゝに捨置といひ
人々ねむりて浪人の身なりはる小て和事
のすきふ堀をなす今抱てて家内冷たき氣
とて了り所へもきかまてし御りも是を
てけしうはけに地ぬきうられむ捨置も

退屈し旧友乃媒りて牧野備後守殿へ召出られ
きりぬに極し故七条より告ぐうなふの
先約ありとおし又ふの地獄にいてある
し極して好縁の所て柳に出羽守殿へお戻
へきり極して七条より告ぐ七条内證あり
出羽守殿へこの者より梯子取りと影取りしり
持まへりてふきあはれり元禄三年
臘月廿七日七条よりひきりぬと細と地獄
も是よりしり頭を二つ討りと留二刀あり

玄開り出て足袋より血入り付るる脱てふ美堂
二人より出遁さるる刀より上りぬを懸念し
して七条太夫よりしりぬと極し一討り
しり今一人はしり手て負せりかき跡もみ
逃げし七条太夫よりしりぬと裏門て出て蹲まり
便を達せり取し七条よりしりぬと極し一
りぬ出南北よりしりぬと息つきし七条太夫
しりぬと極ししりぬと極し一討りしり
伏ししりぬと家中の面く左右よりしりぬ

野も追つて一足も歩かぬ長道具は細く
やうやう手ぬ下る或るものより手負く者十餘
人及び自分も多く病と蒙門番と招き
きくねるをなつて歸るなりといひておろ
かしく武勇いふる人の末葉と云ふ可也
四代の孫としてやしなひしき振舞ふ
うきうき人といふにあらざる

積聚と截長壽獲る

阿州安東利左衛門といふ人の祖母三十三歳乃

甚く積聚するやうなり看病の者れ隙をうけい
守り刀で切つて取り腸を引出すと
呼ぶくや告ぐは皆人驚顛頓て外醫を招
き腸を付く積をきき捨て則腸をたき
療治せしむるにふはわたり平愈つて半ハ葉まで
多ありてつりかの積ハ七日おるびく動きて
流るハ藟藟乃にかりしとぞ

少年矢數

石川備中守殿家の子梶川勝茂十二歳にして

元禄十三年四月五日乃蓄弓矢と翌日午に射す
了江戸深川三千三百堂了て半堂を射る熱教
一万二千二百餘を通り矢一万十本を射るいふ
も射ぬらん勲色なりしうも矢師より後小數乃
も射るて、以後了射手所をゆぐ左よりてハ我等
家職なりしとて強ち了射へくうは是非なく
てし皆く至て主人は若殿とゆふまゝなりしふ
既了り平了て念うくおぼくさるゝとて又射
百本を射通しありとて主人斜に悦みぬい
て

即坐り百石に恩禄をぬりしとる